

Weekly Report

ROTARY CLUB OF NAGOYA MIZUHO



創 立：1980年(昭和55年)11月10日
 会 長：泉 憲一
 幹 事：亀井 直人
 クラブ委員長：山回 哲司
 例 会 日：毎週木曜日PM12:30～
 会 場：ビルトン名古屋

事 務 局：460-0008
 名古屋市中区栄1丁目3-3 ヒルトン名古屋910号
 T E L：052-211-3803
 F A X：052-211-2623
 M A I L：2760_nagoya@mizuho-rc.jp
 U R L：http://www.mizuho-rc.jp/

第1614回例会

～新世代のための月間～
 クラブテーマ：「熱田の杜・友愛・気品」

2013年9月12日(木) 晴 第10回

司 会：会場委員 鶴田 浩さん
 齊 唱：「我等の生業」
 ゲ ス ト：2008年4月～2009年3月米山奨学生
 楊 麗娟さん

会長挨拶

泉憲一会長

ご存じのように、7年後の2020年に東京でオリンピックが56年ぶりに開催されることになりました。これを勝ち取るためには、本物のオリンピックさながらの「戦い」がありました。本日はそのことについてお話ししたいと思います。



国際オリンピック委員会の総会で、招致委員会メンバーの8人が、英語でのスピーチをしました。その中でも、ロンドンオリンピックでの銀メダリスト、フェンシングの太田雄貴選手のスピーチが、最も注目を集めました。そのスピーチは、英語の発音や、声の強弱など、基本的なことはもちろんのこと、表情、身振り手振り、間のとり方、そしてなんと「まばたき」のタイミングまで、プロのトレーナーにみっちり指導されました。「フェンシングの大会くらい緊張した」、「フェンシングと今回のスピーチは似ているものがある。一人よがり話しているだけではダメで、そこにいる全員がそれに同調し、一体となってみんなで一つの劇を演じきる感覚です」と太田選手は言っています。東京の名前が呼び上げられた瞬間は、この緊張と責任が爆発し、太田選手の号泣している映像が画面いっぱい流れ、私たちの心も震え上がりました。そして、インタビューで、「今まで生きてきた中で一番幸せ」とその時の心情を答えていました。銀メダルを取った時より嬉しかったのでしょうか。日本の期待が銀メダルの時より大きかったのかもしれませんが。今回のことで、太田選手は「金」を勝ち取ったのと同じ役割を果たしたと思います。本当のオリンピックはこれからですが、とりあえず「大役お疲れ様でした」と言ってあげたいです。

他には、フリーアナウンサーの滝川クリステルさんが、日本の伝統である「おもてなし」という言葉を紹介し、見返りを求めないホスピタリティの精神を、日本人は古くから受け継いでいて、日本人の超現代的な文化にも根付いているとスピーチしました。例えば昨年、現金3,000万ドル以上が、落とし物として東京の警察に届けられたことを例にあげて、東京は世界一安全、安心、清潔なことを訴えました。

安部晋三首相も、福島原発の影響について「東京は絶対に大丈夫、コントロールされています」という内容のことを力説されました。この「コントロールされている」という言葉に賛否両論がありましたが、東京に原発の影響がないよう有言実行して頂き、東北の復興

とともにオリンピック開催が行われるよう、これから政策を進めて頂きたいと思います。

昭和39年の東京オリンピックの標語は、「世界は一つ 東京オリンピック」でした。これを作った人は、現在名古屋市中区にある乾徳寺の住職、高間公平さんである事を中日新聞で知りました。今回の招致委員会が掲げたスローガンは「ディスカバー・トゥモロー～未来(あした)をつかもう」というものです。「スポーツの力で、震災で未来を失った人に希望と勇気を、という信念を軸に、私たちがひとつの大きな夢をもって、新しい日本、そして明るい未来をつくりだしたい」という強い願いが込められています。安倍首相の決定後の記者会見で「力を合わせれば、夢はかなう」という言葉もありました。これから、日本人が一丸となって、知恵と力を合わせて、東北復興とオリンピックを成功させていきたいと願っています。また、これから競技に参加する子供たちにオリンピックに対する夢と希望を与えることができます。東京オリンピックが決まり、明るい未来が出来ました。我々も人生において2回も観戦出来るということを、楽しみに7年間を過ごしていきたいと思っています。

ニコボックス

高木元明ニコボックス委員長

- ・9月9日は56回目の誕生日でした。 関谷 俊征さん
- ・先日、誕生日を迎えました。これで名古屋瑞穂RCに30代がいなくなりました。 鈴木 淑久さん
- ・妻の誕生日に綺麗な花を頂きました。 馬場 将嘉さん
- ・昨日は妻の誕生日でした。素敵な花をいただきました。ありがとうございました。 鶴田 浩さん
- ・敬老の祝品ありがとうございます。 鈴木 圓三さん
- ・昨夜老人の日の近づいたことを思い、2007年11月28日に名城病院で心筋梗塞の治療をうけた事を思い出しました。感謝しております。 江口 金満さん
- ・米山奨学生・校友会の楊 麗娟(ヨ レイケン)さん。今日は、名古屋瑞穂RCへ卓話にお越し下さいまして有難うございます。本日の校友会総会でお会いできることを楽しみにしています。私事ですが、9月1日付けで会長になりました。 遠山 堯郎さん
- ・酒井さんの入会を祝して。鈴木淑久さん、ありがとうございました。 亀井 直人さん
- ・先週、北陸の朱鷺の台C.C.で中部オープンを無事終了することができました。又、東京オリンピックの決定バンザイです。 泉 憲一さん
- ・2020年東京オリンピック開催を祝して。 渡辺喜代彦さん
- ・先週、母が亡くなりました。91歳脳梗塞です。家族で見送りました。 高須 洋志さん
- ・いい天気です!! 内田 久利さん
- ・ロータリーバッジを忘れました。 八木沢幹夫さん

出席報告 高木元明出席委員長

会員64名 出席42名 (出席計算人数47名)

出席率 76.4% 9月 4日は補填により 89.8%

幹事報告 亀井直人幹事

- ・本日13:40よりヒルトン名古屋9階「ことぶきの間」にて第3回理事会を行います。
- ・長瀬さんのご自宅の住所と電話番号が変更になりました。メールボックスに入っていますので、ご確認ください。

新入会員入会式

バッジ・ネームプレート授与:泉憲一会長

お渡ししたバッジは、ロータリアンであるという誇りと、奉仕をさせて頂くという謙虚な心で着用することになっております。名札は会員、ビジター、ゲストに貴方の氏名を覚えて頂くのに役立ちます。

頑張ってください。これから宜しくお祈りいたします。



酒井俊光さん挨拶

初めまして、ただいまご紹介頂きました酒井俊光と申します。

この様な創立34年目を迎える由緒ある名古屋瑞穂RCに入会させて頂き、誠にありがとうございます。私は8年前に2年弱の間ですが守山のRCに所属しておりました。また初心に戻って奉仕活動を邁進していきますので、ご指導とご鞭撻の程よろしくお祈りいたします。ありがとうございました。



敬老の日お祝い

本年度敬老お祝い対象者

嶺木	一夫さん	江口	金満さん	山田	鎮浩さん
鈴木	圓三さん	岩本	成郎さん	岩田	吉廣さん
越原	一郎さん	高村	博三さん	森	恒夫さん

敬老の日お祝いの挨拶:広瀬弘幸さん

9月16日に敬老の日を迎えられる諸先輩の皆様には、まずお祝い申し上げます。おめでとうございます。

さて、今回改めて敬老の日の意味を調べたところ、『長きに渡って社会に尽くしてきた老人を敬愛し、長寿を祝うと共に、若年者が高齢者の福祉に関心を深める機会になるようにとの願いが込められている』とのことでした。

私たちが当たり前のように生活しているこの日本社会は、諸先輩方のご尽力により築いてこられたものということに感謝申し上げます。



共に、今後も先輩の皆様のご健康をお祈り申し上げまして、お祝いの挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございます。

敬老祝いのお礼の挨拶:鈴木圓三さん

ただいま激励のお言葉をいただき、ありがとうございました。

今回、敬老のお祝いを受けられた9名は77歳以上の年齢の会員で、戦前・戦中・戦後の苦勞の多い激動の時代の体験者です。

ところで、名古屋瑞穂RCの現在の会員は63名ですが、その年齢構成を調べてみると、65歳以上が34名で53.96%、50歳代が11名、40歳代が8名です。高齢者と若い会員とのバランスのとれたクラブです。

日本は今後、超高齢化社会になるといわれており、RCにおいても同様と思われます。40代、50代の若い会員と人生経験豊富な高齢の会員とが協力し、名古屋瑞穂RCも益々の発展に寄与してまいりたいと思います。

特に、次年度は近藤雄亮ガバナーを輩出したクラブとして、会員全員一丸となって、近藤さんを支えていきましょう。

私も今後とも健康に留意し、名古屋瑞穂RCのために頑張りますので宜しくお願いいたします。ありがとうございました。



大口寄付認証式

高村博三さんが大口寄付認証され、クリスタル像とピンバッジが進呈されました。



卓話 楊麗娟さん

ロータリーとの縁

本日は『ロータリーとの縁』をテーマに2つ卓話をしたいと思います。1つ目は『ロータリーとの出会い』、2つ目は『ロータリーのおかげで出来た色々な事について』です。

まずは詳しく自己紹介させていただきます。名前は楊麗娟と申します。出身地は中国の天津という街です。天津と聞くと皆様は甘栗を連想されると思いますが、実際は栗の採れない土地で、周りの地域で採れた栗を集めて港から世界に輸出しています。天津市は皆さんがよくご存じの北京市の少し南の辺りに位置し、海に面しています。北京と同じ様に冬になるとマイナス19度になる様なとても寒い所です。

私の経歴ですが、2001年10月の全世界に衝撃を与えたアメリカ9・11テロ事件の後、来日しました。2003年3月にヒューマンアカデミー日本語学校を卒業し、その後4年間麗澤大学へ通い卒業しまし



た。2009年3月に横浜国立大学大学院を卒業し、同年4月に住友重機械工業株式会社入社、同年7月に名古屋製造所に転勤、同年10月から愛知県にある米山奨学生学友会に参加しています。

それではロータリーとの出会いについてお話していきます。私は2006年9月から高円寺にあるLTC日本語教室に通い始めました。そこには日本人ボランティアの方がいて、多数の外国の学生が集まって日本語の会話や文法などを習っています。毎年スピーチ大会があり、何人か推薦で参加できるのですが、先生の薦めで2007年の3月10日の大会に出場することになり、幸運にもその大会で優秀賞を頂くことができました。その大会の共催者が東京杉並RCだったことがロータリーとの出会いのきっかけとなりました。

次にロータリーのおかげで出来た色々な事についてお話していきます。米山奨学金の審査のうち、面接で「ロータリーについて以前から知っていましたか」と聞かれたことが印象に残っており、私は以前出場した大会の共催者が東京杉並RCだったことをお話したところ、審査が通り1年間奨学金を頂くことになりとても幸運だったと思います。

大学院に通うのはとても大変でした。言葉の問題もありますが、朝から晩まで研究に時間を割いている為、アルバイト等をすることも出来ず金銭面でも厳しかったので、奨学金を頂くことが出来て大変助かりました。おかげで学生生活の思い出を沢山つくることも出来ました。ここで大学院での2年間の研究内容について少しお話していきます。

研究テーマは『料理画像の自動分類に関する研究』です。このテーマにした理由は2007年頃、世界中に生活習慣病の方が増えており、日本にはバランスアドバイスサービスという栄養士が患者から送られてきた食事の写真を見て栄養バランスの結果を患者に返信するというシステムがありました。人の目で1枚ずつ確認してしており大変な作業で人手も足らなかったためコンピューターで自動判別することが出来れば社会に活用できるのではないかと研究室で話し合いがありました。しかし、このコンピューターシステムを作るにはとても長い時間がかかるので、まず第一歩として料理画像の自動分類が必要と考え、研究テーマにしました。

自動分類の研究には大量の料理画像データが必要だったので、学生時代に自分の食べた料理の写真ではならず、インターネットから条件に合った画像を引用しました。栄養バランス分類は人の目でも判断が難しいのでコンピューターに記憶させて分類させるのはとても困難でした。例えばこちらの写真を見て頂くと分かりやすいかと思いますが、ラーメンでも種類が様々で、寿司も何貫か判別しなければなりません。刺身か肉かの判断は人の目でも見分けがつかないので分類率が低くなりました。カレーライスも白と茶色の2色だけなので分類率がとても高く、納豆は色判別が難しく沢山の粒があるため一番低い分類率でした。2年間研究に時間を使いましたが、社会に応用するにはまだまだ研究不足ですが、私の後輩が引き継いで研究をし、改良されれば社会に応用できるのではないかと思います。私の研究の内容は以上です。

次にロータリーのおかげで沢山の思い出が出来たので少しご紹介いたします。写真は元世話クラブの方との葡萄狩りへ行った時のもので、一緒に映っているのは当時の私のカウンセラーで足が少し不自由なのにも関わらず私を色々な所へ連れて行ってくれました。

横浜ベイクラブには毎年恒例のダンスパーティーがあり、奨学生の時に招待して頂きました。私はダンスが得意ではなかったのですが、当時の会長の奥様にとても丁寧にダンスを教えて頂いた事を覚えています。

学生時代はボウリングが好きで研究室の先輩や後輩と一緒にROUND1に行きました。当時住んでいた寮は少し変わっていて、ベトナムや韓国など海外からの学生も住んでいたため、彼らともよく一緒に出かけました。国際会館でのガーデンパーティで司会を務めたこともとても思い出深いです。

2008年の6月に住友重機械工業株式会社の内定を頂きましたが、その後世界経済が不景気になってしまい、周りの同級生の中には内定を取り消された方もいて、自分もそうなるのではないかと心配しましたが、無事就職することができました。

色々な話をしてきましたが、ロータリークラブの皆様のおかげで学生最後の2年間を楽しく過ごし、大学院も無事に卒業する事が出来て、念願叶って日本で働くことができました。大変感謝しております。今後もお付き合いしていけたらと思っておりますので、宜しくお願いいたします。

国際ロータリーニュース

栄養価の高い原生植物にロータリアンが注目

オーストラリアのブルース・フレンチさんは35年間、地元食材を使った料理がブームになるずっと前から、地元の食材を食べ続けています。そして現在、食糧の安全保障の問題を抱える国の人びとのために、ロータリー会員と協力して、発展途上国における現地食材の推進に力を注いでいます。

非営利団体「Food Plants International」を創設したフレンチさんは、25,000もの食用植物のデータベースをつくり、各植物について生育地、環境、写真や挿絵、調理方法などのデータを記録しています。

オーストラリアのダベンポート・ノース・ロータリークラブ会員で、農業専門家のバス・グリーンさんも、現地に育つ栄養価の高い植物に関心を寄せる一人です。「栄養ある植物が何千種類もありますが、現地の人にはそうした植物についてほとんど知りません。私たちは、人びとが身近な植物から栄養を取れるようにする活動を行っています」と話すグリーンさん。2007年には、フレンチさんとともに、発展途上国の人びとに必要な栄養素を現地の植物から摂取することを推進する「Learn Grow」プロジェクトを立ち上げました。

このプロジェクトは、ダベンポート・ノース・ロータリークラブとロータリー第9830地区の支援を受けています。さらに昨年、「食用植物を推進するロータリアン行動グループ (Food Plant Solutions Rotarian Action Group)」がRI理事会により正式に承認されました。

「発展途上国では飢餓、栄養失調、食糧不足などが切実な問題です。西洋的な

やり方で食糧生産を試みても、それがかえって新たな問題を引き起こすことがある」とグリーンさんは説明します。フレンチさんも、「熱帯地域に住む女性のほぼすべてが貧血の問題を抱えている。彼女たちにキャベツをあげても、体調が悪化してしまうだけ」と話します。

「Learn Grow」は2010年8月、ソロモン諸島で試験的プロジェクトを実施し、地元の食用植物一覧、生産方法、学校や地元団体のための植物図鑑などを作成しました。この取り組みは地元団体からのサポートを受け、研修でも協力を得ました。これまで20の発展途



上国から問い合わせがあり、現在は北朝鮮でのプロジェクトを実施中です。

最近では西洋諸国でも、地元で生産された農作物を食べようという意識が高まりつつある、と話すフレンチさん。「35年前に私が同じことを推進しようとしても理解されませんでした。今ではこうした考えを多くの人に受け入れてもらえ、嬉しく思っています」

ポリオの後遺症に苦しむ子どもたちを支援

14歳くらいの男の子に、スポーツについて尋ねれば、お気に入りのチームや選手の名前、自分が大きくなったらプレーしたいポジションなど、すぐに答えが返ってくるでしょう。

ナイジェリアのアブジャに住むサマラ・ハリドゥさんの答えは違っていました。ラジェンドラ K. サブー元RI会長がアブジャの病院でこの質問をしたとき、ポリオの後遺症に苦しむ彼は、逆にこう質問してきました。「私は、自分の足で立つことができるのでしょうか」

12月、サブー元会長はサマラさんのような子どもたちを助けるため、ナイジェリアで10日間の医療ミッションを実施しました。ロータリー財団の補助金(5万ドル)を利用して実施されたこのミッションでは、19人の医師と6人のボランティアが参加し、ポリオへの感染によって生じた筋肉や骨の変形を治療するため、800件の手術を行いました。サマラさんも両足の手術を受け、今後はキャリパーを装着すれば歩けるようになり、サッカーボールを蹴ることもできるかもしれません。

パキスタン、アフガニスタンと同じくポリオ常在国であるナイジェリア。西アフリカ諸国におけるポリオ予防接種率は、地域社会からの抵抗によって減少しています。この地域では、ポリオ予防接種に関する誤った情報や噂が広まり、親が子どもへの予防接種に難色を示すといった状況が見られています。2012年、ナイジェリアでは121件のポリオの発症が報告され、この数はパキスタンの2倍、アフガニスタンの3倍となっています。

サブー元会長は、1月にポリオ無発生2年目を迎えたインドでも、同じような状況だったと言います。困難な状況でしたが、それを新たな機会として捉え、積極的にポリオ撲滅活動を展開したインド。「貧困や非識字といった問題に悩まされているインドでもポリオ撲滅を達成できるのですから、ナイジェリアでもできるはず」と元会長は話します。ナイジェリアも同じような問題を抱えていることもあり、ミッションに参加したインド人医師らはナイジェリアの人たちに同情し、できる限りの支援を行うことができたと言います。

病院の待合室で、親たちと話しをした際、サブー元会長は、「たった数滴のワクチンで、ポリオからほかの子どもたちを救うことができる」ことを伝えました。親たちはその話に心を打たれ、こう答えました。「ほかの子どもたちが同じ苦しみを経験することがないように、地元に戻ってこのメッセージを伝えます」



新しい発想で若い職業人にも入会のチャンスを

ロータリークラブに入会したいと考えていた29歳の元ローターアクター、ケイティ・エリスさんは、就職のためミネソタ州ミネアポリスに



転居してまもなく、いくつかの地元ロータリークラブを訪れました。そこで彼女は、若い職業人のライフスタイルでは、伝統的なロータリークラブへの入会が困難だと実感しました。

「会員は素晴らしい方ばかり。でも自分がこれらのクラブに入会するのは難しいと感じた」と話すエリスさん。「職場では新人の私が、毎週のように遅く出勤したり、昼食時間に2時間も抜けることは認められません。エントリーレベルの給与では会費も高すぎました」

そこでケイティさんは、自らサウスメトロ・ミネアポリス・イブニング・ロータリークラブをつくり、創立会長となりました。2010年の設立以来、このクラブは既に、ほかの多くのクラブが苦勞している課題、つまり「若い新会員を入会させる」という課題を克服しています。このクラブの会員はすべて、20代と30代です。

会費は、例会での食事をなくすことで低く抑えました。また、アフターファイブに例会を開き、月に1度は例会の代わりにボランティア活動を行っています。「月に1度、講演者を招いてホテルで例会を開きますが、例会の前にはきまってホテルのバーで親睦を深めています」とエリスさん。「(転職や転勤のため)入退会者が多いのはやむを得ませんが、ここでは皆、熱心なロータリアンになります。ですから、退会後も移転先のクラブに入会したり、自分でクラブをつくらたりする会員が多いのです」 そういう彼女も、2011年にデンバーに移り住み、現地のデンバー・サウスイースト・ロータリークラブに入会しました。「ミネアポリスのクラブは、エネルギーにあふれ、これまでになくタイプのクラブでした。今でも当時の仲間たちと頻りに連絡を取り合っています」

現在もロータリーに新風を巻き起こそうとしているエリスさん。しかし、彼女が考えているのは、会員の若さだけではありません。「確かに、ロータリーは若い会員を必要としています。2009年には、40歳未満の会員はわずか11パーセントでした。しかし、問題は年齢だけにあるわけではありません」

例会や会議に出席できないときにスカイプでの参加を希望する人や、入会后、何年、何カ月も待たずに、すぐにクラブでの決定にかかわりたい希望する人がいる、と彼女は指摘します。「若い会員は、入会直後から積極的にかかわりたいと考えています」

例会のご案内

■今週卓話 9月19日(木)

卓話講師：名古屋学院大学経済学部教授
水野 晶夫さん

内 容：大学と地域との連携について

～名古屋学院大学事例を中心として～

■次週行事 9月26日(木) RACとの合同例会

場 所：ヒルトン名古屋5階「銀扇の間」
時 間：19:00～20:30

■次々週卓話 10月3日(木)

卓話講師：ドラコンプロ 安楽拓也さん
内 容：飛ばすなら今でしょ!